
マの男の者

はにい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マの男の者

【Nコード】

N7714D

【作者名】

はにい

【あらすじ】

感動ファンタジーコメディ？いつものようにファミコンで遊んでいると、カセットケースの中に見たことのないソフトを発見した。ソフトの名は「マの男の者」。ゲームのスタートと共に、突如復活する魔王とそのシモベ、そしてそれを追う女勇者……みんな自称。なんだかよくわからないけど、「マの男の者」を巡る戦いに、僕は巻き込まれてしまった。毎週火曜日更新予定です。

プロローグ

「この歌を 歌っていれば ホタルに会える はずだから」

*

光が入り込むことのない暗闇で対峙する影が二つ。

ホタルは剣を構え、魔王を追い詰めていた。

魔王は膝をつき、ホタルを睨んでいた。

一瞬の隙も許されない緊迫感が、二人を覆っている。互いの息遣いだけが存在するかのように、動きを止め牽制を続けている。その時間は長く続くかと思われた。

ホタルは感じていた。

この戦いは、もう終わる。

魔王の息遣いの同調が乱れた一瞬に、ホタルが剣を振り下ろした。魔王はそれをすばやく避け、立ち上がりながら両手を自身の前に構える。

赤黒く輝く両手。そしてホタルを襲う火柱。ホタルはそれを受けながらも、なおも魔王に襲い掛かる。

いくつもの剣の軌道が空を斬る。

魔王は襲い掛かる剣を避けながら、暗闇さえも包み込むような漆黒の球体をあらわにした。願う、世界の終わりを。

「カオスよ、発動しろ！ そして人間どもを滅ぼせ！」

「そんなことはさせない！」

ホタルの剣が素早く降りかかる。それを受け止める魔王。

「邪魔をするな、ホタル！」

「星に変わっておしおきだ、魔王！」

力が込められた剣が、じりじりと魔王を追い詰める。

「私はこんなところで朽ち果てたりしない！」

剣を振り払い、魔王は逃れようとするが、ホタルの「バナナ」という声に、その場に滑って転がる。魔王の足にはバナナが散乱している。

「終わりだ、魔王！ 我が最大魔法を受けよ！ 上を指して見上げれば、こんなに暗い空の中、瞬く星のささやきも、闇をてらすやさしさも！」

「こんなところでやられるわけにはいかぬのだ！」

魔王の叫びと共に、魔王から放たれた火柱がホタルを襲う。ただホタルはそれに動じる事はなかった。

火柱の中で右手を天に掲げている。

「スターダストレビューー！」

振り下ろした右手から閃光が放たれ、魔王を包みこむ。魔王の体を光の空間に溶かし始めた。空間を包んでいた闇の気配も徐々に薄れていく。

ホタルは長い戦いの終わりを察したのか、安堵の表情を浮かべる。そして白銀に輝く剣を静かに収める。

これであいつと会える……。

が、再びホタルの表情は険しくなる。魔王は溶けていく体を宙に浮かし、見開いた目でホタルを見ている。真つ赤な口は大きく開き、まるで笑っているようだった。

「……くく、私は消えぬよ」

ホタルは、魔王の体から異様な淀みが溢れだしているのに気付いた。

「その体、頂くぞ！」

魔王の体から現れた大きな闇がホタルに襲い掛かる。ホタルは咄嗟に剣に手をかけたが、そこまでだった。

*

叩きつけるような雨。稲光がする闇夜。

漆黒のマントをまとった魔王と対峙する一人の女。

魔王は冷たい目で、女を見下ろしている。

女は膝を突き、魔王を睨んでいる。

女の傍らには、ホタルが持っていた白銀の剣が転がっている。

「今日こそホタルの体を返してもらおう！」

魔王の顔が稲光に照らされる。冷たい目をしたその顔は、魔王を追い詰めていたホタルだった。

うつすらと笑った魔王は、右手を掲げる。

「バナナ！」

女はその場で転ぶ。立とうにも足場のバナナで滑って立つことが出来ない。

剣に手を伸ばすが、魔王がその剣を遠くへ蹴り飛ばした。女は唇をかみ締めた。

「何度も齒向かう愚かな女め。この体はこの魔王が頂いたのだ！」

魔王は徐々に笑い声を大きくしながら、闇夜に溶け込むように消えていった。

「待て魔王！……待って……ホタル」

第1話 マの男の者

勇氣は夢を見ていた。

幼い頃のほがらかとの思い出。

忘れかけた頃に、まるで思いださせるかのようにいつも見る夢。

傷つけるつもりはなかったんだ、恥ずかしかったただけなんだ……。

勇氣は心の中で呟いた。

*

「勇氣君！」

振り返ると、ほっちゃんが走って近づいてきた。どうしてかはわからないけど、すぐくうれしそうな顔をしていた。

「どうしたの？」

そう聞く僕に、ほっちゃんはりボンとかわいい紙で包まれた箱をくれた。

ほっちゃんはニコニコしていた。

「なにこれ？」

僕はほっちゃんに聞いた。ほっちゃんは少しばかり頬を赤らめると、うれしそうに言った。

「バレンタインデーチョコ！」

「……なにそれ？」

「えー、勇氣君知らないの？ かつこわるーい」

得意げに言うほっちゃんの言葉にムツとした。

ほっちゃんは楽しそうに話を続けた。

「バレンタインデーはね、女の子が好きな男の子にチョコレートあげる日なんだよ。」

僕は全然楽しくなかった。

あんなに傷つくなんて思わなかったんだ……。
誰かを傷つけていくなら、一人でいた方がいい。

*

勇気は気たるそうに、ほがらかと「いつせーのゲーム」をしていた。

いつせーのゲームとは、自分の言った数字と、上げた親指の数が一緒だったら良いというゲームだ。

喉が渴いたと言ったほがらかは、ジュースのおごりを賭けて！と僕に勝負を挑んできた。それに乗ってはみたものの、正直、自分の家に帰って飲んでもらいたかった。

「いつせーの2！」

ほがらかの気合の入った甲高い声とは裏腹に、指は1本しか上がっていない。ほがらかは渋い顔を浮かべている。次は僕の番だ。

「いつせーのせ1」

指は1本。僕の勝ちだ。

と、何が不満だったのか、ほがらかが物言いをつけてきた。

「今、フェイントしたでしょ！」

「フェイント？」

僕は気にせず、ファミコンの電源にスイッチを入れる。案の定、接続が悪く、TVにはザーツという砂嵐しか映っていない。小さくため息をつく。

我が家のゲーム機は初代ファミコンのみだ。WIIとかPS3とか、そんなハードは持ち合わせていない。

そういうハードが欲しかったが、ファミコンバカである姉ちゃんが許してくれなかった。

コードの接続部分に時計を乗せて、接続のいい場所を探る。

ふと気付くと、ほかほかはまだ僕を睨んでいた。

「なんだよ、早く買ってこいよ」という僕の言葉を、甲高い声が切り裂いた。

「いつせーでしょ、いつせーの！ そのあとの『せ』はフェイントよ！」

……くだらない。

僕はテレビに視線を戻した。画面にはクリア寸前のロールプレイングゲームのオープニングが映し出されていた。コントローラを手にとった。

するとほかほかは2コンを持ち、マイクボリウムをあげ、コントローラに向かって怒鳴り始めた。

「卑劣！ 卑怯！ 卑猥よ！」

「卑猥関係ないだろ。それっぽい言葉並べればいいってもんじゃないよ」

画面では一癖あるモンスターが出現している。

「ちよつと、ひとりでゲームする気！？」

最初に補助系魔法で、全員の能力を上げておく必要があるな。

僕は魔法コマンドを選択した。画面が暗くなる。このゲーム特有のロード時間だ。が、一向に画面が回復しない。

僕は接続切れかと思い、ファミコンを見た。

そして目に入っただのは、リセットボタンに置かれた人差し指だった。当然その人差し指の持ち主は、ほがらかだった。

「二人でできるゲームしょ」

……なんてことを。

データが飛んでしまったのではないかと、不安がよぎった。そんな僕とは対照的に、ほがらかは満面の笑顔を浮かべている。

……あの笑顔は危険だ、ここでもう1度電源入れてもまた消されるだけ。完全にデータが飛ぶかもしれない。

僕は消されても問題のないゲームを探し始めた。

「牛乳は？」

「まだ勝ったつもりなの！？」

「つもりもなにも勝ちだよ」

ソフトをあさっているカゴの中に、見覚えのないソフトを見つけた。

「……マの男の者？」

知らないソフトだ。また姉ちゃんが得体の知れないソフトを買ってきたのか。

そのソフトをカゴに戻そうとすると、勇氣はそれを戻してはいけない気配に駆られた。もう1度そのソフトに目をやった。真っ黒のプラスチックに赤い文字で『マの男の者』とだけ書かれていた。シンプルすぎて不気味なものだった。

勇氣は少しだけ躊躇していたが、それをファミコンに差し込み、電源を入れた。

「またひとりやるの！？ そんなことしてると私、他の人にとられちゃうわよ！」

勇氣はほかの言葉には耳を傾けず、画面を食い入るように見ている。まるで何かに導かれるように、画面に近づいて見ている。

「ロールプレイングみたいだ」

「もういい！ 牛乳買ってくればいいんでしょ！」

ほかからは、あからさまに足音を立てながら、部屋を出て行った。勇氣はそれを気にせず、画面の指示に従って名前を入力した。

「『ゆうき』というか」

突然の声に、僕はコントローラを落とすほど驚いた。あたりを見回しても、部屋には僕しかいなかった。

……この当時のソフトに音声なんてないはず、でも確かに聞こえた……。

僕はしばらく動けなかった。目だけで何度も何度も部屋を見渡した。でも、やっぱり誰もいなかった。

……ならやっぱりこのソフトなんだろうか？

僕はリセットして、もう1度『マの男の者』を起動した。そして画面の指示に従って名前を入力する。でもさっきの声は聞こえなかった。

……気のせいかな。

ただ、気味が悪かったので僕はテレビとファミコンの電源を切って1階に下りる事とした。

力子。

勇氣の部屋のテレビと『マの男の者』が差し込まれたファミコン

の電源がひとりでにつく。

真っ暗なテレビ画面に白い文字が浮かぶ。

ツイニ コノヒ ガ キタ

ユウキ ト イウモノ ファミコン ノ デンゲン ヨ ツケテ
オクノダ

ソレガ ワタシヲ フツカツサセ オマエニ チカラヲ アタエ
ヨウ

第2話 姉ちゃん、降臨！

気味の悪かった『マの男の者』をもう1度動かした。名前を入力してみたけど、声は聞こえない。やっぱり気のせいか……。

なんだかすつきりしないままだったけれど、僕はいつのまにか『マの男の者』にはまりこんでいた。グラフィック、バトルアクションはオーソドックスだったけど、そのオーソドックスさが逆に好きだった。

——数日後。

いつもならゲームをやり続ける僕の邪魔をするほがらかだったけど、今日は好物のプリンを食べているためか、おとなしかった。

僕としてははやく帰って欲しかったけど、そんなことを言ったら静観にゲームをやるこのバランスが崩れると思って、特に話しかけるでもなく、ゲームをし続けていた。

ただそんなバランスも、プリンの減少と共に崩れ始めた。

「なんでいつも一人で遊ぶの？」

逆に、なんでいつも傍にいるのか僕は聞きたかった。

「イヤなら帰っていいよ」

直後、ほがらかから発せられる気配にハッとした。ほがらかの表情は案の定、強張っている。

「浮気してやる！」

「浮気もなにも付き合ってないし」

「え！？」

何でそんな驚いてるんだろうか。

「……冗談でしょ？ 私たちとってもラブプリンじゃない♪」

「……ラブプリンってなんだよ？」

「私と勇気みたいな関係♪」

「どろどろってことか」

「どうしてプリンがどろどろなのよ！ プリンプリンしてるからプリンなんでしょ！」

プリンプリンってどんな関係だよ……。

「なによ、その目！」

「……どろどろだろうが、プリンプリンだろうが、ラブプリンって意味はよくわからない」

「……わからないの？」

「わからない。第一、そういうのめんどくさいから嫌なんだ」

ほがらかは目を潤ませると、ファミコンの電源ボタンを押した。

「あっ！ いいとこまで行ってたのに、何するんだよ！」

「勇気なんて、ずっとそうやってゲームをしていればいいんだわ！ そのうちゲームが恋人になって、誰も構ってくれなくなればいいのよ！」

ほがらかの口から怒涛の如くプリンが襲ってくる。僕はそれを寸でかわしていく。

「そうなりたいね！ プリン飛ばすな！」

「なんでそんなこと言うのよ！ 私といっしょにいたくないの！？」

「ひとりでいたい！」

ほがらかの潤んだ目から、ぼとぼと涙が溢れ出した。

泣くなら近づかなければいいのに。

僕はファミコンの電源を入れた。

ボン！ という音と共にテレビが爆発する。

その煙の中から、鎖力タビラを着た女——姉ちゃんが現れた。

「泣かしちゃダメよ！」

姉から放たれた木の棒——おそらくこん棒——が僕を襲う。それをさっと避ける。そしてこん棒はほがらかを直撃した。なおも鳴き

声上がるほがらか。

——身内で言うのもなんだが、姉ちゃんは電波的だ。

勇気の姉、小翼こしほはほがらかに近づき、頭をなでた。

「あらタンコブが！ ひどいわねえ」

「それは姉ちゃんだろ！」

「勇気、ほがらかちゃんの気持ちもわかってあげないとダメよ。結婚しなさい」

「話飛びすぎ！ しかも僕の気持ちは尊重されないの！？」

「僕の気持ちって、ほがらかちゃんのこと好きなくせに」

するとさっきまで号泣していたほがらかが顔をあげ、うれしそうに言った。

「ほがらかのこと好きなの！？」

「いや」と僕はきつぱり断る。

さらに声を大きくして鳴き始めるほがらか。

「泣くなよ、……めんどくさい」思わず本音が出た。

その言葉にねえちゃんは、鋭い目で僕を睨みつけていた。

——怒らせてしまったかな。確かに言い過ぎたかも。

謝ろうと口を開くと、姉ちゃんはほがらかを突き飛ばし、さらに僕までも払いのけて、僕の後にあるファミコンに食らいついた。

「これ、勇気が買ったの？」

鋭い視線はファミコンに向けられてたんだ……。

「こんなソフト、私のリストにはまったくないわ！ マの男の者！？」
よし、こうなったら早速プレイよ！」

姉ちゃんは興奮しながら、ファミコンのスイッチを入れた。当然さっきの爆発でテレビが映るわけなかった。

「テレビが！ お姉ちゃんにはやらさせない気！？」

「姉ちゃんが壊したんだろ」

姉ちゃんは慌てて部屋を出たかと思うと、自分の部屋のテレビを持ってきた。

そこまでやりたいんだ……。

「キー！ このソフトもか！」

いつものヒステリックが始まった。

姉ちゃんは名前入力にひとつの悩みがあった。このソフトにもそれが当てはまってしまったみたいだ。

姉ちゃんはブツブツと文句を言いながらも、ゲームを進めていく。

「……オーソドックスなロールプレイングみたいね」

「姉ちゃんが買ったんじゃないの？」

「買ってないわ」

「……なら、なんでここにあるんだろう」

「！」

姉ちゃんは何か思いついたのか、驚愕の顔を浮かべた。

「ひょっとして季節はずれのサンタクロース!？」

……。

第3話 サンタクロース、降臨！

「……姉ちゃん、何歳だよ」

姉ちゃんのあまりにも子供染みた言葉にため息をついた。

「……あんたサンタクロース否定した？」

「サンタクロースなんているわけないだろ」

「言っちゃったわね！ 言ってはいけないこと言っちゃったわね！
サンタクロースはいるわよ！ だってお姉ちゃん見たもの！」

「うそばっか」

「うそじゃない！ 真っ赤な顔をしたおじいさんが、その道路に
いたもの！」

「それただの酔っ払いだろ。それにサンタが赤なのはコカコーラの
宣伝だよ」

「なにそのちよつとした豆知識は！」

「サンタはいないんだよ。いい歳なんだからそんなこと言わないで
くれよ」

と、背中にイヤな気配を感じた。振り返ると、ほがらかが恐ろしい
形相で立っていた。姉ちゃんとのやりとりで、床に倒れていたほ
がらかの存在をすっかり忘れていた。

ほがらかの視線はファミコンに向けられている。

するとテレビからカタカタカタと文字が流れる音がした。テレビ
画面を見ると、「ケスナ」という文字が見えたような気がした。た
だ次の瞬間には、ほがらかの指がリセットボタンを押していて、そ
の文字はテレビから消えていた。

「勇気のばか！」吐き捨てるように、ほがらかは部屋から出て行っ
た。

「……リセットを押すあのクセ、立ち悪過ぎだよ」

僕はファミコンのコントローラに手を伸ばした。ただその手をぐっと掴む、姉ちゃんの手があった。

「まだサンタクロースの議論は終わってないわよ」

「まだ言ってるのかよ」

「……実はねえ、サンタクロースがいるっていうすごい証拠があるのよ。ただ、これを見せると『マジエスティック12』に捕まると思つて隠してたんだけど……。でも勇気の「サンタクロースなんていない」っていう、そのひねくれた性格を治すためには仕方ないわね」

「……なに、その証拠って」

「あまり大声出して驚かないでよ。お姉ちゃんだって自分の身を危険にさらしてまで見せるんだから」

「……ならいいよ」

すると姉ちゃんは、物凄いがっかりした顔を浮かべた。そしてじつと僕を見つめ続けた。

……見て欲しいなら、そういえばいいのに。

「……で？」

「……これよ」

そう言つて、姉ちゃんは白いヒゲを僕に見せた。そのヒゲの両側にはゴムがついていた。

僕は姉ちゃんに呆れた視線を向けた。姉ちゃんの目は「これ……違うの？」と訴えていた。僕の目は「ドンキホーテ」にあるよと訴えていた。

「何してるのあんた！ ほがらかちゃんを追いかけなさい！」

「……いいよ、すぐ戻ってくるよ」

「勇氣、ほがらかちゃんがいつまでも見つめてくれてると思つたら大間違いよ」

「別に構わないよ」

「そんな人を傷つけるような悪いコのところにはサンタクロースは来ません！」

「くだいな！ 一人でいたいんだよ、でてけよ！」

僕はイライラしながら、スタートボタンを押した。

画面に一瞬、「リセットヲオサセルナ」という文字が浮かんだように思えた。

「え？」

しかしもう画面には文字は映っていないかった。かわりに後ろの状況が反射して見える画面には、真っ赤な力ッコをした、まるでサンタクロースのような人影が映っていた。

！ 僕は慌てて振り返った。

「ベイベー、いいコにしてたかい？」

その真っ赤な人は、僕に満面の笑顔で近づいてきた。

「ほらいたじゃない！」

姉ちゃんは興奮気味に言っている。

サンタクロースなんているわけがない！ じゃあ、誰だ、こいつは！？

「この真っ赤な服からして、答えはひとつだろ。ベイベー、いいコにしてたかい？」

姉ちゃんはこの真っ赤な怪しいやつに、歓喜の目を向けている。

「！ これは私のひげじゃないか！」

そう言っただけ姉ちゃんのゴム付ヒゲをさつと顎に付けた。

「なんだこいつ！？」

僕はあまりにも危険な雰囲気はこの存在に、動揺していた。

姉ちゃんはというと、なぜか僕の方を見て驚きの表情を浮かべていた。そして言った。

「言っちゃったわね！ 言っではいけないこと言っちゃったわね！」

「何が！？」

第4話 魔王、降臨！

「そう、お前は言っではいけないことを言ってしまった」

と、謎の声がしたかと思うと、突然コンポから音楽が流れ始めた。

……『スカイハイ』！？ でも僕はこんな曲を持っていない！

さらに部屋のドアがバン！ と開く。

そこには黒いマントを来た、これまた怪しい男が立っていた。

「私は魔王、魔王パルプフィクション。お前の言葉により、千年の時を超え目覚めた」

「だから言っちゃいけないかったのに！」

姉ちゃんが僕を非難した目で言う。

すると、先ほどの真っ赤な怪しい女の人の声が変わり、高らかに話し始めた。

「感謝するぞ、我らを永き眠りから解放してくれたのだからな」

「これも必然という事か。フフ、ついに我ら魔の力がはびこる時がきた」と黒い怪しい人。

「サンタとして暮らした千年間、あまりにいい事をしすぎて魔物ということを忘れかけてしまいました」と赤い人。

「苦勞をかけたな、ギューン」と黒い怪しい人。

な、なんだ、この小芝居は！？

すると黒い怪しい男が、僕の方を見た。

僕は咄嗟に目をそらした。姉ちゃん以上の電波な人だと思い、目を合わせたくなかった。

「その人間、我が僕として使わそう」

「ありがたきシアワセ、魔王様」

姉ちゃんは膝をついていた。電波同志は、引き合ってしまうのか！？

僕は事が大きくならないうちに、日本の治安を守ってくれる警察に電話した。これほど警察に頼りなくなった事は、今まで一度もな

かった。

それに気付いたのか、黒い怪しい男が僕を睨んだ。

「電話にでんわ！」

黒い怪しい男から発せられた、驚きのダジャレ。しかしさらに驚きなのは、その言葉と共に、電話が切れたことだ。

受話器から聞こえる、プープーという音。

「我が魔法の威力思い知ったか、したたかまったか！」

「素晴らしき力、魔王様」

「それが噂の電話か」

「電話？」

「コペルニクスがリングが落ちるのを見て『その木の枝を折ったのは私です』と言って発明されたそうだ」

「勉強家ですね、魔王様」とすっかりシモベ気分の姉。

「姉ちゃん！ そんなうさんくさい人たちから離れる！」

僕の心からの叫びに呼応するように、またひとつの声があがった。

「魔王をあなどるな！」

第5話 勇者、降臨！

今度はジョンガラ節の音がコンポから流れ——当然こんな曲を持つていない——あやしいカッコをした女の人が見れた。

「闇に住みし魔の心 導き照らすかお星様」と、ヒーローとかのお決まり台詞のようなものを語り始めた。

「夜な夜な暗闇包もうと いつもあなたが見守って たとえ行く道なくしても 知らず知らずに気付かずに 一人でいるときや見上げなよ 光るあなたが一番星！ 貴様の悪事、星に変わっておしおきだ！」

「でたな！ でちゃったな！ でてしまったな！」
確かに怪しい人がまた出てしまった。

「さあ、今日こそホタルの事を聞かせてもらうぞ！」

銀色に輝く剣を黒い人に向けている。銃刀法違反なんじゃ……。

「お前に構ってる暇はない」

「『マの男の者』か！？」

「マの男の者？」

「そのとおり！ 『マの男の者』を我が手に！」

「私が先に見つけてみせる！」

「ほう、邪魔をするか？」

勇気はファミコンにささっているソフトを見た。そこに書いてある『マの男の者』の文字。

「やっぱりこのことか……」

一瞬の静寂とこっちに向けられている視線。

と、耳をつんざくような声が一斉にあがった。

「探していた物がこうも見つかるとは！」

「それを渡しちゃダメ！」

「黙れ、小娘！ シャルウィーダンス！」

と、女の人はその場でクルクル踊りだした。なんで踊りだしたかは知らない。もうこの電波な人たちに深入りしないんだ。

「さあ、渡せ！」と必至の形相の黒い人。

なんだろう、この必至さ。すごいプレミアなソフトなんだろうか。

「工藤静！」と、踊りながら女の人。

すると黒い人が似ても似つかないモノマネを始めた。なんでモノマネしだしたかは知らない。そうこの電波な人たちに深入りしないんだ。

「邪魔をするな、勇者気取りのへっぽこ娘！」

「……気取りだと？ 私は勇者だ！ 勇者「ああああ」だ！」

ああああ！？

「前から言うように勇者の名前が『ああああ』のわけない！」

「まるで名前登録がめんどくさいから、『ああああ』になったと言わんばかりだ。どうせ兄弟に『A A A』とかいるんだろう！」

そう言って二人は高らかに笑った。

「く！ 気にしていることをズケズケと！」

本当にそんな名前なわけがない。国の審査が通るわけがない。くっ！ この電波な人たちに深入りしないと決めたはずなのに、考えてしまう！

「Aボタン連射で入力済む簡単な名前だな、ハハハ！」

高らかに笑う二人。女の人というと、涙を浮かべている。ちょっとかわいそうな気が……。

「むきー！」と剣を振り回して魔王に襲い掛かる女の人。

危ない！ 僕は床に倒れこむように剣の軌道からそれた。

パキッ！

女の人の剣が僕の大事にしていたプラモデルを砕く。やっぱりかわいそうじゃない！

そして剣が魔王を襲った時、その剣の軌道がぴたりと止まった。

「……お前にトドメはさせまい？」

不適に笑う黒い人。

「バナナ！」という赤い人の声に、女の人はずべるように転んだ。
そして黒い人は僕を睨みつけ、そして手を伸ばしてきた。
「さあ、その『マの男の者』を渡せ！」

第6話 エンカウト

これまで黙っていた姉ちゃんが、肩をワナワナと揺らし、怒りの形相で黒い人を睨んでいた。

「言っちゃったわね。言ってはいけないことを言っちゃったわね！ゆるさない！ 侮辱するヤツはゆるさない！」

名前を侮辱したことに怒る姉ちゃんを見て、僕は少し見直した。

パラパラパラランラン♪ パラパラパラランラン♪

コンポから流れる、ファミコン版『スパルタンX』のテーマ曲。姉ちゃんは少々猫背に構えた。そして黒い人に歩み寄ったかと思うと、正拳突きをかました。

「は！ は！ は！」

ぐあ！ と吹っ飛ぶ黒い人。

「魔王様！」慌てて赤い人が駆け寄る。

「ふしゅう、スパルタンXパンチよ」

「つ、強い！」と、ああああという人。

正直、強いというより、黒い人が弱いんじゃない……と僕は心の中で突っ込んだ。

「やるな貴様！ 次は私が相手だ！」

赤い人が姉ちゃんの前に立ちはだかる。ひょっとしたらこの人は強いかもしれない。

「姉ちゃん、気を付けて」

「かかってきなさい！ 11人目は飛び蹴りで二千点！」

僕の心配とは裏腹に、コアなネタを言えるほど、姉ちゃんにはゆとりがあった。

赤い人は大きく息を吸って、一気に言葉を吐き出す。

「みんながきらいな納豆のにおい、スメールスメールどこに住める……」

「危険よ！ Aクラス魔法よ！」と、ああああという人。

が、姉ちゃんは復唱中の赤い人に「あちよう！」と、思いつきり飛び蹴りをかました。

きゃ！ と吹っ飛ぶ赤い人。

「なんて強さ」と、ああああという人。

魔法ひとつ唱えるのにあんなに長かったら……と僕は心の中で突っ込んだ。

黒い人が姉ちゃんを睨みながら、ゆっくりと立ち上がった。

「……まだ力が戻らないか。ち、ここは退くぞ」

黒い人は、部屋の窓に足をかける。

「あぶない」という僕の呼びかけを無視して黒い人は、勢いよく飛び出した。

あゝという2階から落ちていく断末魔。

それを見た赤い人は、申し訳なさそうに「あの……玄関はどっちですか？」と聞いてきた。

僕は丁寧に玄関を教えると、赤い人は一度深くとお辞儀をした。

けれど、あげた顔はまたさっきの表情に戻っていた。

「また会おうぞ！」

足早に赤い人は去っていく。

「待て、まだホタルのことを聞いてない！」

ああああという人は部屋の扉まで追いかけたが、諦めたのか、その場に座り込んだ。

……この人は帰ってくれなかったか。

「はははは、はは、ははははは」

姉ちゃんの繰り返し止まらない笑い声だけが部屋にこだましていた。

「……大丈夫か、姉ちゃん？」

姉ちゃんの笑いは徐々におさまり、息を切らして「誰か、タイムボタンを押したわね」と意味の分からないことを言った。

……何だったんだろ、あの人……いや、あああという人も含め
て、この人たちが。

第7話 まったくもって信用できない話

「千年前、世界に危機が訪れた。今の、魔王パルプフィクションによつて」

そう話し始めたあああ——本名と言ひ張る彼女に、もう突つ込むのはやめることにした——の話を、当然信じることはできなかった。千年前といえば、平安時代。いろいろ乱はあつたようだけど、魔王だとかそんなのは歴史の教科書に載っていない。

そんな僕の疑惑の目を感じたのか、あああは「信じてないのね」と残念そうに言った。

そんな僕とは反対に、姉ちゃんは「私は信じる」と言った。その言葉に、あああは喜びの目を向けていた。

「信じてくれるの？」

「魔王なんでしょ？」

「ありがとう」

そう素直に喜ぶあああの表情からは、人を騙しているような感じはしなかった。ただ、だからと言って信じられるわけでもなく、僕は踏み込む気もないあつちの世界の話だと割り切ることにした。

「礼はいらない、私は勇者だからね」と姉ちゃん。

いつのまにか姉ちゃんは勇者になっていた。もうあつちの世界の住人だ。いとも簡単にログインしてしまったみたいだ。

ただその姉ちゃんの言葉に、あああの表情が一瞬曇った。姉ちゃんはそのに気付かないのか、話を続けた。

「前から私は他の人と何かが違うと思つてたんだけど、まさか勇者だつたなんて」

興奮した姉ちゃんは、華麗とはいえない舞を踊った。

「勇者は私よ」

そう、あああは立ち上がり言い返した。その目は真剣だった。「勘違いはやめなさい」と姉ちゃん。

ああああは、羽織っていた唐草模様のマントをバサツと広げた。

「このかつこうを見なさいよ、明らかに私が勇者じゃない！」

「風来のシレンみたいなカツコのどこが勇者よ！」

「Ｔシャツに言われたくない！」

「Ｔシャツって、こう見えても七分丈よ！」

「見ればわかるし！　なによ、こいつ！」

ああああの言葉が僕に向けられた。まいった、話をふられてしまった。

ああああは激昂して顔が真っ赤だ。姉ちゃんは「ゆうしゃ」と言えと口バクをしている。なにがなんだか。

僕は小さい溜息をついて、あああに言った。

「目立ちたがり屋のゲームバカ」

その言葉にああああは冷たい目を姉ちゃんに向け、言い放った。

「なんだ、ゲーバカか」

「ゲーバカ？　言ってはいけないことを言っちゃったわね！　私は

ゲーマー狭鯖小翼よ！」

「小翼？　ださ」

その言葉に姉ちゃんはガクツと膝を曲げた。姉ちゃんのトラウマに触れてしまったからだ。

「……確かにナマエ入力がつきだした頃、4文字しか入らなくて『こつはさ』だった。時には『てんてん』が邪魔して『こつば』だった。そんな『さ』が不憫でよく歌ったわ。『さあ、行くんだ、このドアを開けて』……私の『さ』はどこに行ったの！？」

「さあ？」と言ってやりたい。

が、そんなどん底の中、姉ちゃんはああああを指さし、言い放った。

「あんただってダサイ名前じゃない！」

今度はあああがガクツと膝を曲げた。今この部屋でどん底の二人がいる。2chのアスキーアートを思い出させるほどの、見事なガクツとぶりだ。

でも次の瞬間、同時に顔をあげ、見つめあった。そしてがつちり握手し、「ださい名前同盟！」と言って、妙な連帯感を帯び始めた。まあ、喧嘩するよりかはいいけど。

「だから、さっきナマエのことで私をかばってくれたのね」

「……何のこと？」

「言っていいことと悪いことがあるって。……私が名前をああああってバカにされた時」

「そうだ！ あいつあんな事言いやがった！ Aボタン連射だ？」

Aボタンは連打だ！ 連射は連打の結果だ！」

……そうだったのか。

少しでも姉ちゃんを見直した自分が情けなかった。

ふと、ああああの目線が僕に向けられているのを感じた。僕はあああの方を見た。あああは「あなたの名前は？」と聞いてきたので、「狭鯖 勇気」と答えておいた。

この時点で、僕もログインしてしまったのかもしれない。

*

カタカタカタ。

部屋のテレビ画面に、文字が表示される。

ドウイウ コトダ？

第8話 スター スター

一方、近所の公園では。

「大丈夫ですか、魔王様」

足を痛がっている魔王を、ギューンは心配そうに見ていた。

「痛いよ、もう」と、逃げこんだ公園のベンチに座り、半泣き状態で己の足をさすっている。魔王というには随分と華奢な足には、外傷は見られない。

「足をだして下さい」

ギューンは魔王に声をかけた。

「ほう、回復魔法か」

魔王はさすっていた足をギューンの方へ向けた。

ギューンは差し出された足に片手をのせると、まるで母親のように優しく魔王に微笑みかけた。

「痛いの、痛いの、飛んでゆけ」

「わあ、母さん、痛みが飛んで行くよって、お前が飛んで行け！」

その言葉に対し、ギューンは魔王の目を真剣に見詰め、静かな声で答えた。

「飛びたいところですが、あいにく私には翼がありませんので」

「真面目に答えていい！……私は魔王だよ。なんでたかだか2階から飛び降りただけでくじいてんの？ 魔王って強いんじゃないの？」

「最強です」

「じゃあ、なんでこんなに痛いの？」

「泣かないなんていい子ちゃんでしゅねー」

「うん、ママ、僕ががんばったよって、さっきから何、母親気取りなんだ！」

と、ギューンを突き飛ばす魔王。

ギューンは勢いあまって尻もちをついたが、すぐさま体勢を整え、申し訳ありませんと答えた。

ギューンは、思っていた。

魔王様はホタルという男の体を奪ってから、様子が変わってしまったと。

以前のような圧倒的な抑圧、何もかもを包み込むような闇、そのような力が感じられないのだ。

ただそれは、まだ力が戻っていないだけだと思っしかなかった。

2階から飛び降りただけでくじいてしまう魔王であつたとしても、魔の世界ではトップであることは変わらないのだ。

自信を取り戻すことで、力も取り戻してくれることを願っていた。

「第一、何でお前なんともないんだよ！」

「玄関から出ましたから」

「そんなのありかよ！」

と、その瞬間、魔王に驚きの表情が浮かんだ。魔王はギューンを指さしながら、ワナワナと声を震わせる。

「ひよ、ひよっとしてあなたが魔王様!？」

「は？」

「その頭の回転のよさ、そうだ、そうに違いない」

魔王はまるで何かに気づいたように、コクコクと頷き、そして頭を抱えた。

「この千年の間に、私はとんだ勘違いを起こしていたんだ! いつの間には私は魔王になっていたんだ? いつから魔王と思いこんでいたんだ!？」

「あなたは魔王です。まぎれもない魔王パルプフィクションです」

「私を洗脳するな!」

「こんな真つ赤な魔王がいますか! 魔王は黒いんです」

すると、先ほどから特異な視線を二人に向けている公園で行き来

する人から、黒い服の人を見つけ「なら、やつか!？」と指差した。
「あれは『ギャラリー』というモノです。私たちを見物しに来た極楽集団です」

「私は見せ物ではない!」

「そう、あなたは『見せ者』じゃない、『見られ者』です。あなたの華やかさを見られる『見られ者』です」

「言い方変わってるだけで、結局見られてるではないか!」

「そう、見られてることに代わりはない。しかし、前者は言うなれば大根役者、しかし後者はにしきのあきら」

ギューンの言葉に、魔王は困惑の表情を浮かべている。しかしギューンの饒舌は止まらない。

「『見せ者』というのは上野のパンダでしょう。しかし、『見られ者』とは目を引かす輝きを持った者です。言うなれば夜空の星です。そう、スターです!」

「スター?」

魔王がぴくりと反応した。

「あなたはスターです。あきらに負けないぐらいスターです」

その言葉に魔王ははじめ黙っていたが、やがて小さな笑い声とともに、歓喜の表情を浮かべた。

「そうだ、私はスターだ。誰にも負けないスターだ。フフ、スター・パルプフィクションだ!」

「スター!」と拍手を送るギューン。

「つてやっぱり魔王じゃないじゃん!」

「魔王ですよ!」

「だって、スターって!」

あつと声を上げるギューン。

疑いの目を向ける魔王。

しかしギューンは何か思いついたのか、咄嗟に言葉をつなげた。

「魔王のスターです!」

「……魔王のスター?」

ギューンは、その疑念を払うかのように言葉を続ける。

「魔王の中の輝く魔王、魔王のスターです。かっこいい!」

「……かっこいい? ……かっこいいか」

魔王はかっこいいという言葉を復唱し始めた。そして、ニヤリと陰気に笑う。

「そうだとは思っていたんだ、私は魔王のスターだと思っていたんだ!」

「魔王のスター様!」

「私は魔王のスター・パルプフィクション! 魔の世界を広げるため降臨したのだ!」

「よ、魔王のスター様!」

高らかな笑い声が響く公園。

徐々に徐々にパトカーのサイレンが近づいていた。

第9話 ファミコンの歴史

「なにこれ？」

ああああが、『マの男の者』を片手に首をかしげていた。

ファミコンのカセットと答えたけど、ああああは首をかしげたままだ。確かに僕がファミリコンピューターを知っているのは、マニアな姉ちゃんがいるからであり、全盛期の頃にプレイしていたわけではない。だからファミコンのカセットを初めて見るというのも、仕方ないのかもしれない。

そんなことから、昔のテレビゲームだと言ったけど、ああああの首はいまだに戻らない。どうもテレビゲームというものの自体を知らないらしい。

まあ、自称千年前の女だもんな……。

ちなみに姉ちゃんは、ファミコンを知らないという言葉を受けて、長々とあああに説明していたけど、途中から陶醉してしまって、説明というより弁論になっていた。そこまでの熱意を別のところで活かしてほしい。

ちなみに姉ちゃんの説明兼弁論は以下のとおり。

「ファミコンとは任天堂が1983年7月15日に発売したファミリコンピューターの略よ。ドンキーコングやマリオブラザーズから始まり、ドラクエなどの数々の名作を作っていた、一時代を築いたひとつの文化とっていい。しかし、時代の流れというのは残酷なもので、常に向上を求める需要者は、16ビットのPCエンジンやメガドライブへと目を移し、ファミコン自体はディスクシステムの限界を境にスーパーファミコンへと姿を変えていった。そしてその後も64やゲームキューブ、WIIと姿を変えていったけど、もうそこにはファミコンの面影はなくなっていた。ファミコンがあらゆる媒体を開発、そして進化させていったのは事実であり、今と

なつては、この当時のソフトはフロッピーディスクに収まってしま
うほどの「ちゃちさ」だけど、今もその情熱は消えることなく、む
しろ燃えている。ビデオ端子のファミコンが発売されており、あの
接続不良の苛立ちも改善され、中古屋では昔なつかしく、またこん
なゲーム知らんぞと言わんばかりのソフトが並ぶ。影ながら人気の
あるソフトは破格の値段を誇示し、失敗作ディスクシステムすら高
額を示す時もある。どこで書き換えするの！？　ただ時代が再びフ
ファミコンを求め始めたようだ。ファミリートレーナー。一時流行つ
たダンスダンスレボリューションの先駆けであり、WIIでもリバ
イバルされたような商品が現われている！　時代が求めるニーズに
古ぼけたこの過去の栄光が輝きを取り戻しているのだ！　私は思う。
WIIやPS3などの次世代ハードに立ち向かえるのは、この初代
ファミコンのみだと。なぜなら、人々は進化の中でも故郷を求める
からだ。これから進む未来に期待をしながらも、思い出を振り返え
らずにはいられないからだ。どうかみんなも探して欲しい。物置の
奥で眠るこの小さな輝きを見つめなおして欲しい。小さいながらも
強く、そして激しく輝いている！」

「で、この『マの男の者』って一体？」

僕の質問に、ああああは少し困った顔をしたあと、ニコとした。

「わからない」

「……わからない？」

「うん」

その表情から何かを隠しているとは思えない。ほんとに分からな
いんだろう。

これが何か分かれれば、多少なりとも彼女たちが何なのか分かるか
と思っただけ、逆に分からないことが増えてしまった。じゃあ、な
んでこれを探していたんだ、ああああは。

「だ、だって魔王が手に入れようとしてるから！」

つまりは、魔王が探し求めてるから、渡さないようにしてるって

ことだろうか。

「だって危なそうじゃない！」

君たちの存在が危ないよ……。

「なんかへんな雰囲気の流れてる。……信じてないでしょ？」

僕は頷いた。

ああああは少し悲しそうな顔をしたけど、気持ちを立て直したのか、僕の手を取って意気揚々と、まるで宗教の勧誘のように微笑んで、言い放った。

「ただ、これがあなたの手にあるってことはきつと何かの縁だわ！
いっしょに戦いましょ！」

僕をそっちの世界に巻き込まないでくれ。

が、その僕の願いも空しく、最初の戦いが訪れることとなった。

最初の敵、それは僕の部屋の入口で、顔の表情をワナワナさせた
ほがらかだった。

ほがらか VS 僕とあああと弁論中の姉ちゃん。

だから僕を巻き込まないでくれ。

第10話 戦慄

「その手は何！」

ほがらかの視線は、僕の手をつかんでいるあああに向けられていた。

ほがらかからは強烈なプレッシャーがあふれていた。

「第一、その人誰よ！」

ほがらかはすごい形相で近づくなり、僕とつながれているあああの手を、力強く切り離し、僕を睨みつけた。

「最近、勇気がラブプリンじゃないと思ってたら、キー！」

そのつんざく声に僕は耳をふさいだ。

ああああも耳をふさぎながら、僕に聞いてきた。

「彼女は？」

と、おそらくああああは言っているんだろう。彼女の口の動きからそれを読み取る。

僕は幼なじみと答えた。

「\$ \$」

彼女の口の動きは、明らかに『幼なじみ』ではなかった。なんとなく、タラモパスタと言った気がする……。

「幼なじみ？ 違うわ、恋人よ！」

ほがらかの声は、耳をふさいでも届く。恐るべき声質だ。

「あ、幼馴染って言ったのか」

やっぱり、ああああは違う風に聞こえたらしい。

「恋人じゃないよ」

「なんでそうやって私たちの関係をウソつくの？」

「本当のこと言ってるだけだろ」

と、ほがらかのが急に愕然とした表情を浮かべた。

「ひよ、ひよっとして二股!？」

なぜ、そうなる……。

「ああああさん！ 勇気は私の恋人ですから身を引いてください！」

「身を引くもなにも、そういう関係じゃないですから」

「なに？ ウソをつくの？ 私はそんな鈍感じゃないわよ！ さっき手をつないでたじゃない！ 私ですら遠足でしか手をつないだことないのに！」

「あれはいつしよに戦おうって言ってただけで」

「戦う？ なにと戦う？ 私と戦う？ いやよ、私は別れないわよ！ 二人がどんな説得したって嫌だからね！」

「そういう戦いじゃないです！」

「じゃー、どういう戦い!? ネチネチした戦い!? 勇気の肩に髪の毛を残して、ひよっとして浮気!? とか些細な疑いから破滅へと導くような小細工を用いたそんなネチネチした戦い!？」

だめだ、もうほがらかを止めることはできない。流れに身を任せるしかない。

と、ほがらかはおもむろにファミコンに近づいた。そしてさっと持ち抱えると、またもつんざく声で言った。

「ファミコンばかりしてるから、こんなコスプレ女に騙されるのよ！ 捨ててやる！」

「マの男の者を捨ててはだめ！」

ああああは、ほがらかからファミコンを奪い返そうとする。ほがらかは、渡すまいと背に回す。

「マの男の物？ これは勇気の物よ！」

「そういう意味じゃない！」

「あつ！ いつから勇気はマになったの!? 私ですらやつと呼び捨てなのに略させるなんて！」

「そのマの男の者は私にとって大事な物なの！」

「また略した！ 私だつて勇気が大事なのに！　なんで、なんでわかつてくれないの！？……さみしいよ、勇気」

そう言つて、ほがらかは部屋を飛び出した。

「まって！」と、ああああは急いでほがらかを追いかけた。

と、いつの間にか弁論をやめていた姉ちゃんが、僕を見ていた。
「追いかけていいの？」

追いかけるも何も、僕は何も悪いことをしたわけじゃない。

僕は姉ちゃんの言葉を無視して、ベッドに横になった。

僕の目には天井が映つてゐる。

僕は小さい溜息をついた。

……めんどくさい。

第11話 マの男の者 ↓ 魔王

魔王の復活とともに、街には魔物たちも復活していた。

ただ、その風貌は全身黄色の服を着用し、頭にアンテナがついた、ちよつとイタそうな人間のような感じであり、視線は浴びるものの、騒ぎ立てられることなく、日常生活に溶け込んでいた。

そんなの魔物たちの間では、魔王が弱いがために、わだかまりが生じ始めていた。

魔王の夕食をスーパーに買い物に来ていた1体のピカ獣は、満面の笑みを浮かべていた。

「ついに魔の力がはびこる時がきたピカ！」

その言葉に、片割れのピカ獣は表情を曇らせた。

「……どうした、ピカ？」

「魔王様じゃ無理だと思うピカ」

「そんなことないピカ！」

「ほんとうにそう思うピカ!？」

「……」

ピカ獣はさらに言葉を続けた。

「封印されていた千年間、ずっと考えていたピカ。あのホタルとかいう勇者の体に乗っ取ったときから魔王様は変わったピカ。きっと呪われたピカ」

「そんなことないピカ！」

*

魔王は、してやったりの表情を浮かべていた。

その手には、マの男の者が挿入されたファミコンが握られ、そし

て目の前には、ほがらが縄で縛られている。

「じつについている。人質として捉えるつもりが、まさかマの男の者までセツトとは」

ギューンも、魔王の言葉にうなづく。

「なに、見てんのよ!」

ほがらは魔王達に鋭い睨みを向けた。

「……こわいな」

身の危険を感じたのか、魔王は一步下がった。

「しかし、まさかこうも簡単にトラップに引っ掛かるとはな」

「リサーチしていた甲斐がありました」

「プリンを使うなんて卑怯よ!」

「卑怯? 道に落ちているプリンを拾ってしまうような、己の食い意地の悪さを呪うんだな」

「くっ」

「しかし、マの男の者を手にしておきながら、その使い方が分からないとは」

魔王はマの男の者を、あらゆる角度から見ているが、首をかしげるばかりだった。

ほがらかはうつすらと涙を浮かべていた。

「助けて、私が何をしたの? 家に帰して」

「落ち着いたようですね、魔王様」

「魔王?」

魔王はほがらかに近づき、怯えないように優しく声をかけた。

「魔王ではありません。魔王のスターです」

魔王なりのこだわりが、そこにあった。

「私をどうするつもりなの? もしかして生け贄とか?」

「安心して下さい、そんなことはしません。このファミコンという物の扱い方を教えてくれればいいのです。もし協力して下さるのならその縄をほどきましょう」

魔王様！ というギューンの言葉を魔王は静止し、なおも続けた。「この使い方さえわかれば、あなたを解放します。どうぞ、協力してくださいませんか？」

魔王は、紳士に問いかけた。その態度にほがらかも魔王のことを信用したのか、小さく頷いた。

「わかりました。縄が手に食い込み痛いんです。はやくこの苦痛から逃して下さい」

「ギューン、ほどうてやれ」

ギューンは一瞬ためらったが、魔王の命令では仕方ないと、縄をほどき始めた。

「痛い思いをさせ、申し訳ありませんでした」

魔王は深々と頭を下げた。

次の瞬間、その脳天にほがらかの踵が落下した。

「痛いのよ！」

くらくらと崩れ落ちる魔王。

魔王様！ と駆け寄るギューン。

「何が魔王だ、ばあか！」

ほがらかは勢いよく部屋を飛び出した。

第12話 大魔法使いな魔王

気を失いかけている魔王を揺さぶりながら、呼びかける。それに呼応するかのように、魔王の目が弱々と開いた。

「魔王様！」

「……魔王のスターって言ってるだろう」

「……すいません、魔王のスター様」

魔王はギューンから目をそらし、か細く語り始めた。

「……また、負けたよ」

「……」

「ヤツが魔王のスターか？」

「違いますよ！」

「強かったぞ」

「あなたが魔王のスターです！」

「魔王のスターがこうもやられるか」

「やられていません！」

「どう見てもやられてるだろ、私は」

「突然の腹痛にやられてるだけです」

「そんな痛さじゃねーよ！」

魔王の目は涙目だ。

「痛い、痛い、飛んでゆけ！」

「同じネタ繰り返し返すな！ 回復魔法ぐらい使えないのか！」

と、ギューンは何か思いついたのか、咄嗟に言葉をつなげた。

「そうだ、魔王様は……魔王のスター様は魔法使いだったじゃないですか！」

「魔法使い？」

「はい、だから肉弾戦があまり得意じゃないんです」

「……だが、魔法使いは弱いだろ。お前みたいに唱えている間に攻撃されたら、ひとたまりもない」

「それは私が魔法を唱えるのが遅いからです。魔王のスター様なら唱えるのなんてアツという間です」

「ほんとかよ」

「魔王のスター様、早口言葉得意じゃないですか。東京シャンソンショー」

「東京シャンソンショー」

その言葉は確かに早い。

「魔術師手術中」

「魔術師手術中」

明らかにギューンより早い。

「ピザ、ピザ、ピザ……」

「ピザ、ピザ、ピザ……」

ここは？ とギューンは肘を指す。

「ひざ！ と言うと思ったか！ お前の懐かしい遊びにつきあっている暇はない！」

「すいません。しかし、早口言葉早かったじゃないですか。それだけ、魔法を唱えるのが早いってことです」

「そうか？」

「魔王のスターで大魔法使い、かつこいいい！」

「……かつこいいい？ ……かつこいいいか」

魔王はかつこいいいという言葉を復唱し始めた。そして、ニヤリと陰気に笑う。

「私は、大魔法使いで魔王のスター・パルプフィクションだ！」

「よ！ 大魔法使いで魔王のスター様！」

高らかな笑い声をあげる魔王の隣で、ギューンは少し疲れた表情を浮かべていた。

と、そこに息を切らしてほがらが戻ってきた。

「なんでこの部屋に戻ってくるのよ！ 出口どこよ！」

「調子に乗るのもいい加減にしろ！ フ、お仕置きだ」

と、魔王は魔法を唱えるべく、身構えた。

「ちよつと痛いとお指を見れば、おいこりゃササクレどういっつたい……」

「何ぐだぐだ言ってるのよ！」と、ほがらかの掌底が炸裂する。

ひざから崩れ落ちる魔王。

「魔王様！」

「魔王のスターで大魔法使いだ……また負けた……」

「先ほど、ひざと言ってオチをつけておけば、ひざから崩れ落ちることはなかったはずです！」

「……うまいなお前って、そんなネタはいい！ やっぱりヤツが大魔法使いで魔王のスターだ……」

第13話 愛しのラブプリン♪

いつのまにか寝てしまっていたみたいで、時計を見ると1時間くらい経っていた。

さっきまでのことが夢だったらいいのにと考えたけど、部屋の真ん中で僕を見つめているああああを見て、現実に戻される。

魔王を探さずにこの部屋にいるってことは、どうやら僕の家にお世話になってしまおうと考えているんだろう。

いや、それをお願いされることはきつとない。それが当たり前と彼女は思っているはずだ。遠慮がちな人が、ジュース片手に勝手にテレビを見ているわけがない。

嫌味っぽく、だるそうに、ため息をつきながら体を起こしたけど、彼女は笑顔でおはようと言ってきた。

僕は本気のため息がでた。

「ほがらかは見つかったの？」

僕の言葉に彼女は下を向いて、力なく首を振った。

僕は仕方なく、というより早くこんな訳わからないことを終わらせるために、ほがらかの家に電話をかけた。

ただ返ってきたのは、ほがらかは戻ってきてないとおばさんの言葉だった。

「どうしよう」

ああああが頭を抱えている。

「どこかで時間を潰してるだけだよ」

僕はそう言って、ほがらかが行きそうなところを考えた。

……いつもうちにいるな。

うちに来ていない時のほがらが何をしているのか、僕はわからなかった。

と、その時ドアが開き、頭がプリンの変な者が現れた。

本日4度目の変な者の登場に、僕はもう驚きはしなかった。

「残念ながらほがらかちゃんは戻ってこないプリン」

そうプリンのかっこをした者は言った。

「プリンの魔物!？」

ああああの言葉に、僕は魔物なんていないよと小さく呟いた。

「プププ、ふられてやんのプリン」

あああが剣を抜き、そのプリンに襲い掛かる。

プリンはさつと白刃取りを行ったけど、剣のスピードには追いつけなかった。

ぐしゃつとプリンはつぶれ、それが紙で出来た作りものだとわかる。そしてプリンが何なのかもわかる。

そんな状況でも、プリンは淡々と話し始めた。

「あわてないプリン。私は魔物ではないプリン。ラブプリンだプリン。勇気、お前を一喝するため降臨したプリンだプリン」

「何がラブプリンよ! どう見ても魔物じゃない!」

「魔物でないプリン」

二人のやり取りに僕も加わる。

「たしかに魔物じゃない」

「プリン、なぜ、ほがらかちゃんをいじめるプリン? もっと仲

よくするプリン。ほがらかちゃんがかわいそうプリン」

「いつも言ってるだろ、ひとりでいたいんだって」

「ひとり、ひとりってまだ気にしてるプリン?」

「……もう気にしてないよ、姉ちゃん」

「言っちゃったわね！ 言っではいけないこと言っちゃったわね！」
プリン、いや姉ちゃんは頭に付けた被り物を投げ捨て、物凄い形相で僕に絡んできた。

「そんなにあつさりわかってたらつまないじゃない！ もっとさ、このプリン何者だ！？ しゃべってるぜ！？ って阿鼻叫喚する様を見たいじゃない！」

「仮に姉ちゃんじゃなかったとしても、プリンじゃ阿鼻叫喚しないよ」

「何そのクールぶり！？ そんなんだからふられるのよ！ 言っただしょ、いつまでもほがらかちゃんがいると思ってたら大間違いだつて！」

「……関係ないよ」

「本当かしら？ そんなこと言っただけはかなり焦ってるんじゃないの？」

「僕は魔王とかそういうの信じてないから」

「言っちゃったわね！ 言っではいけないこと言っちゃったわね！

こんなに一生懸命な人を疑うのはダメよ！」

と、ああああを指さす姉ちゃん。

……なんで姉ちゃんはこんなにも燃えているんだろう。

「ああああ、安心して！ マの男の者は勇者、そう勇者の私が必ず取り返してあげるわ！」

ああ、その勘違いが原因か。

「勇者は私！」

と、張り合う二人。

仮にどっちかが勇者だったとしても、醜い勇者だな。

僕は二人のくだらない掛け合いから逃れるため、ファミコンに手を伸ばした。でもそこにはファミコンはなかった。

ああ、ほがらかが持つてってしまったんだっけか……。

僕は仕方なく、テレビをつけた。

なんだかよくわからない通信販売の宣伝だったけど、二人のやりとりに加わるよりはずっといいと思った。

「勇者つてのはねー、親しい人がさらわれ救いに行ったりする悲劇の主人公でないといけないの。ほがらかちゃんとういう関係？ほら、言えない。だからピンチのほがらかちゃんと一番親しいわたしって勇気じゃない！一番親しいの勇気じゃない！」

なんだか猛烈な視線を感じる。危険を感じ、僕はテレビを見続けた。

「く！いつも澄ました態度で、この話の傍観者的な立場にいた勇気が勇者だったらベタベタなのにドラマチックだわ！なんてこと！この無愛想な態度は綿密に練られた勇者ということへの布石だったなんて！」

いや、姉ちゃんの勝手な妄想を僕にぶつけないでよ。

姉ちゃんが立ち上がるのを感じる。

「私が勇者であるには、先に見つけないとだめなのよ！」

そう言って、姉ちゃんは部屋を出て行った。

「まって！」

ああああは立ち上がり追いかけてよとしたけど、その前に僕の方へ振り返ったのを感じる。

「……探しに行かないの？」

ああああはきつと真剣な顔で僕を見ているんだろう。

……僕はひとりでいたいんだ。

「……戻ってくるよ。それにやっぱり勇者だ、魔王だって話、信じてないし。ほがらかが戻ってこないとすれば、姉ちゃんの言った通り僕のが嫌いになったからだ」

ああああがドアの方へ向いたのがわかった。

「人の想いはあなたが思ってるほど見せかけではないわ」

そう言ってああああは部屋を出て行った。

テレビでは、筋肉質の外国人がダイエット商品の宣伝をしていた。

部屋に散らばる姉ちゃんのプリンの被り物。
小さい頃のことを思い出す。

「プリンばかり食べて飽きない」

「飽きなーい」 勇気君こそ、ゲームばかりやって飽きない？」

「飽きてるよ」

「飽きてるの？ なら、ほがらかとお話しよ！」

「いやだ」

「なんで!？」

「ほっちゃんと話すならゲームしてる方が面白い」

「う、うえーん！ 勇気君のバカー！」

また僕はほがらかを傷つけたみたいだ……。

第14話 マの男の者とは？

ギューンはファミコンを前後左右から眺めていた。

「だめです、ぜんぜんわかりません」

そう、彼らはまだファミコンの使い方に悪戦苦闘していた。

「『マの男の者』が目の前にあるというのに何も出来ないとは……」

魔王の声に力はなく、諦めの雰囲気漂っている。

「魔王様、やはりあのほがらかとかいう女に……」

ギューンの言葉に魔王は睨みをきかせた。

「聞けるか？」

「いえ……」

「なんであいつ、あんなに強いのか？」

「強くないです」

「つえーよ。レベル99だよ、絶対！」

魔王の声は、興奮のせいか自然と高くなっていた。

「おそるるに足りません」

魔王の気持ちを抑えようとギューンは冷静に受け答える。しかし

魔王の興奮は収まるところか高まっていった。

「足りてるよ、十分！」

魔王のその声は涙声で、ほがらかを心底怯えていることがギューンにはわかった。ギューンはその頼りない魔王を奮い立たせる必要があった。

「大魔法使いで魔王のスター様の方が強いんです。なぜなら、不死身だからです」

「……不死身？」

「仮に今まで負けていたとしても、今ぴんぴんとしているじゃないですか。不死身なんです。不死鳥フェニックスのとき不死身の大魔法使いで魔王のスターなんです」

「不死鳥フェニックスのとき不死身の大魔法使いで魔王のスター？ …… ギューン、お前はなかなかネーミングセンスがあるな」

「ありがとうございます」

「そうか、私は不死身か。 …… 不死身 …… カッコいい響きだ！ よし、私があの子に聞いてみようではないか！」

そう言つて、部屋を飛び出した魔王だが、すぐにふらふらで戻つてその場に倒れた。

「不死鳥フェニックスのとき不死身の大魔法使いで魔王のスター様！」

「負けたよ、ボロボロだよ。逆に不死身なのが生き恥をさらしてるようでもつらいよ」

「弱音をはかないで下さい！」

「 …… マの男の者は私を拒んでいるんだろうか」

「そんなことはありません！ これは魔王様のモノです！」

魔王はじつとファミコンを見ていた。そしてそのうつろな目を突然見開き、ファミコンを手にとった。

「ホワイトベース！ マチルダが愛したこの船を …… チュドーン！ ウッディー大尉！ 愛ふるえる愛♪」

と、ツーコンで熱唱する魔王。

「 …… 気がすみましたか」

魔王は静かにファミコンを置いた。その姿を見るギューンの目は、冷たかった。

「 …… ところで、魔王様。『マの男の者』とはいったいなんなのですか？」

「 …… 言つてなかったか？」

「私はただ魔王様が手に入れなければと言つていたので協力していただけです。察するに、なにか絶対的な力が手に入るとかそういうことですか？」

魔王は静かに首を振った。

「では何か強い力が封印されてるとか！」

魔王の首はまたも横に振られた。

「ではなにが!？」

「実はな……思い出せないんだ」

「……思い出せない？」

「あの勇者と戦ったときからマの男の者を探さなければならぬという気がしたんだが、なぜ?　ということがまったく思い出せないんだ」

ギューンの魔王を見つめる瞳は、さらに冷たくなっていた。

「では、なんなのかわからないのに探していたんですか？」

「そんな鋭いツツコミをいれるな!　とにかく動かしてみればわかるさ、ハハハ！」

魔王のその自信に充ち溢れた笑い声に、ギューンは「そう……ですか」と答えるしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7714d/>

マの男の者

2010年10月8日12時46分発行